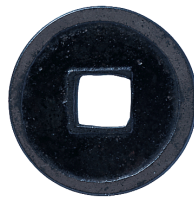


中国貨幣の歴史

17 「開元通宝」の誕生—唐代前期の貨幣—



(表)



(裏)

かいげんつうほう
開元通宝

唐・高祖が武徳4年(621年)に鑄造を開始し、唐代を通じて鑄造・発行された。錢銘の読み方には、上下右左の順に「開元通宝」とする直読説と右回りに「開通元宝」とする環読説がある。



けんぽうせんほう
乾封泉宝

三代高宗の乾封元年(666年)に鑄造され、「開元通宝」とともに流通されるが、翌年には廃止された。

唐の「開元通宝」

約400年ぶりの統一王朝・隋の後に成立した唐では、隋の錢貨統一の基盤を継承しつつ、漢代以来の基本貨幣である「五銖」錢を廃し、新たな「開元通宝」を鑄造・発行する。「開元通宝」は、後の中国における方孔円形錢の基本となり、また日本の「和同開珎」のモデルとされたほか、東アジア諸国の錢貨にも影響を及ぼした。

隋朝末期の混乱の中、隋王室の姻戚関係にあった李淵（後の高祖<618～626年>）が618年に長安を都として「唐」（618～907年）を建国し、二代太宗（626～649年）の頃には各地の抵抗勢力を平定して統一を達成し、支配体制を固めていく。国内的には、隋王朝からの官制（三省六部など）、税制（均田制・租庸調制など）や兵制（府兵制）などを継承、確立する一方、対外的には北方の突厥など異民族の制圧により領土を拡大するとともに、周辺諸民族を臣従、朝貢させ唐を中心とする東アジア世界を形成していく。

貨幣についても、高祖は隋代末期以降に混乱した貨幣流通を立て直すため、621年（武徳4年）、漢代以来の基本貨幣である「五銖」銭を廃し、「開元通宝」を鑄造・発行する。「開元通宝」は、隋の銭貨統一の基盤を継承し、唐王朝の新たな銭貨に発展させたかたちで発行された。「開元通宝」は、大きさ直径8分（0.8寸）（25mm）、重さ1枚＝2.4銖（3.7g強）と定められ、10文（10枚）＝1兩、つまり10銭＝24銖＝1兩という関係が成立し、「銭」は1／10兩という重量単位を示すこととなった。これ以後、銭銘には重量を表示することはなく、「通宝」、「元宝」などの名称が用いられるようになる。こうして登場した「開元通宝」は、唐代を通じ約300年間鑄造され、後の中国における方孔円形銭の基本となり、また、日本の「和同開珎」のモデルとされたほか、東アジア諸国の銭貨にも影響を及ぼした。なお唐代前期には、三代高宗（649～683年）の乾封元年（666年）に、「開元通宝」10枚に相当する「乾封泉宝」（大きさ1寸、重さ2.6銖）を鑄造し、流通を試みるが、物価騰貴を招くなど失敗に終わり、翌年には廃止された。

その後、高宗の皇后である則天武后（684～705年）の専横などにより政治的混乱を招いたが、六代玄宗（712～756年）が混乱を収め、さまざまな政治改革を推進した。これにより社会の安定が図られ、人口は増加し、財政も充実した。唐の時代には、水田開発や商品作物の栽培などにより農業生産力が著しく発展し、これとともに紙・磁器などの手工業や水陸交通も発達していく。玄宗の代には、商品経済、国内外の交易の繁栄のなかで、唐の支配領域は中央アジアにまで広がり、都の長安は世界有数の大都市に発達するなど唐朝の最盛期を迎える。

もっとも、こうした唐朝の繁栄の裏側では、重税、兵役などの負担により農民の耕地喪失、没落化が進む一方、荘園など大土地所有の進展により富農・富商などが出現し、均田制、租庸調制の矛盾が徐々に顕現化して、社会経済状況の変化が進行していく。やがて玄宗末期に、地方の軍司令官の安祿山らによる反乱（「安史の乱」、755～763年）が起こり、これを契機として唐の権威は衰えていくこととなる。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

【参考文献】

布目潮風・栗原益男、『隋唐帝国』、講談社学術文庫、1997年

山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年

山岡直人、「中国貨幣の歴史16 隋の銭貨統一」、『金融研究』第25巻第4号、2006年